

今回の 特集に ついて

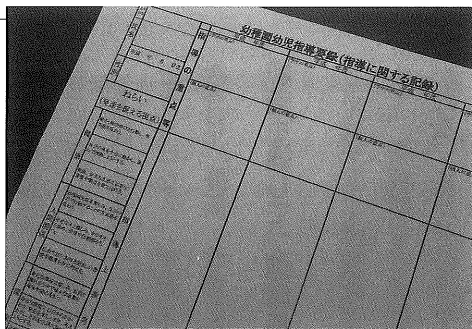
「評価」って何だ？

一九九〇年代、日本では幼稚園教育要領が大きく一新されたころから、子どもの教育評価が「何がどれだけできるようになったか」「試験で何点取れるか」などの、数量的・可視的・競争的な視点から行われがちな傾向に對

化や詰め込み教育への批判などの中で、新しい子ども像と教育観が求められるようになってきたからである。

して疑問や批判が起こり、それが代わる評価方法が模索されるようになる。産業構造の変

一方、グローバル化の進展する中で、欧米先進国は、乳幼児教育・保育の開発と保障、質の向上を、経済社会政策における不可欠のファクターとして考えるようになった。政策決定は、客観的包括的な教育評価を根拠に行われるため、エビデンスベース（科学的根拠のある）の乳幼児教育実践・研究への社会的ニーズが広がった。日本にもこの影響は及び、「エビデンス」や「アカウンタビリティ（利



用者や関係者など社会に対する、保育・教育の目的・計画・成果を説明する責任」という用語がよく使われている。多くの先進各国における乳幼児教育の実態や評価などを、経済開発協力機構（OECD）が総括的に公表したものが、「Starting Strong（人生の始まりを強く）」というタイトルの白書である。

日本も欧米も、より良い評価法を求め研究を進めているが、「評価」という用語自体が、日本における評価論を複雑化させている面がある。二〇一三年オスロで開催された、学校評価に関する国際会議（OECD）の資料を参照すると、日本語で「評価」という一つの言葉で表されるものが、英語の四つのワードで使い分けられている。実例を挙げよう。

- ・ Student Assessment 生徒（子ども）の評価
- ・ School Evaluation 学校の評価
- ・ Teacher Appraisal 教師の評価

つまり Assessment, Evaluation, Appraisal という、「評価」を意味する三つのワードが異なる対象に使われている。

加えて、四つ目のワードは Review である。これは、国家や組織による包括的な評価を指す。例えばニュージーランドは、行政機関から分岐した教育評価機関を持ち、全国の教育組織（学校や幼稚園など）の包括的教育評価（Review）を行い、それに基づいた指導を実施している。

日本では、異なる相の「評価」が一つの言葉で表現されている。このことの長所と短所を考慮する必要がある。

（浜口順子）

